



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3987号 2017.10.31 発行

### 低年金者支援給付、2カ月前倒し

共同通信 2017年10月31日

政府、与党は、低年金で暮らす人に最大月額5千円（年6万円）を配る「年金生活者支援給付金」に関し、2019年10月から支給する方向で検討に入った。当初予定の同年12月から2カ月前倒しし、消費税増税の時期に合わせることで負担軽減を図る。障害年金受給者は月額5千円を上回る場合がある。関係者が30日、明らかにした。

19年夏の参院選を見据え、消費税増税への反発を和らげる狙いもある。前倒しには900億円以上の財源が必要になるため、政府、与党内で調整を急ぐ。年金の積立金をつなぎ的に活用する案も浮上している。

給付金は消費税10%への増税と引き換えに導入される制度。

### クラフトビール醸造で障害者雇用

多様な味、京都で注目 京都新聞 2017年10月30日  
ビールを醸造する一乗寺ブリュワリーの醸造士。「寒くなる冬場はビール造りにも適しています」と話す（京都市左京区）



醸造所ごとに多様な味を楽しむ「クラフトビール」で障害者の雇用を創出する動きが、京都市内で相次いでいる。上京区で障害者の生活介護事業所を運営するNPO法人「HEROES」（ヒーローズ）は今夏、酒造免許を新たに取得した。国際コンクールでの受賞歴も多い左京区の醸造所「一乗寺ブリュワリー」は、大麦栽培などで障害のある人と協力する道を探る。ファンも多いクラフトビールの新たな可能性が注目を集めている。

10月1日、西陣産業会館（上京区）の一角で、ヒーローズの「西陣麦酒醸造所」オープンを祝う会が行われた。第1号のビールは、ユズの香りと爽やかな苦みが特徴の「柚子無碍（ゆうざうむげ）」。

醸造所には瓶詰め機も備える。11月中にはインターネットなどで販売を始める予定で、今後は瓶詰めやラベル貼りが施設利用者の新たな仕事となる。

#### ■小さな事業所でも

ヒーローズは、2013年の開設当初から自閉症や発達障害の人を積極的に受け入れてきた。理事長の松尾浩久さん（38）は、「コミュニケーションの難しさなどもあり、本人に適した就労先が見つかりにくいことも多い」と、実情を語る。

安定した収益を上げられる自主製品の開発を考え、クラフトビールに目を付けた。取り組む障害者施設がまだ少ないことに加えて、酒税法上の区分は「発泡酒」に当たるため、年間に製造が必要な量はビールの10分の1の6キロリットルで足りる。「設備も小規模で済み、小さな事業所でも参入しやすい」という。

松尾さんは、準備の段階で全国10カ所以上の醸造所を見て回り、ビール造りのノウハウ

ウを学んだが、特に頼りにしたのが11年に始動した一乗寺ブリュワリーだった。

精神科医の高木俊介さん（60）と、飲食店経営者の伴克亘さん（52）の異色コンビが経営する同ブリュワリーは、世界中のビールが集うコンテスト「インターナショナルビアカップ」で昨年初受賞し、今年は念願の金賞を獲得した。

#### ■広い連携目指す

2人が目指すのは、質の高いビール醸造に障害のある人が関わる仕組みづくり。今回、松尾さんに共感し酒造免許申請の手続きなどで積極的に協力した。

同ブリュワリーも、設立当初は醸造所での直接雇用を考えたが、高木さんは「もう少し広い連携を今は目指しています」。例えば、原材料の大麦から自分たちで作れば、栽培や加工の段階で障害者の事業所と協力できる…。「方法は違っても、障害者の自立を目指す思いは西陣麦酒と同じ」といい、「障害の有無を超えて協力し合い、楽しくビール造りができれば」と将来の夢を描く。

### 障害者就労「クレドホテル函館」1日開業 85人前後採用

北海道新聞 2017年10月31日  
11月1日に函館市内で開業するクレドホテル函館。障害者を85人ほど雇用する予定だ

【函館】社会福祉法人函館恵愛会（函館、小貫恭也理事長）は、就労支援として85人前後の障害者を雇用する「クレドホテル函館」を11月1日、函館市深堀町で開業する。道保健福祉部によると、障害者の就労支援を目的にしたホテルは、約20人が働く檜山管内乙部町内のホテルに続き道内では2カ所目という。

ホテルは鉄骨造り4階建てで、シングル、ツインなど全42室。車いすに対応したバリアフリー客室も1室備えた。函館競馬場や函館アリーナから徒歩圏内で、市電の電停も近く、ビジネスマンや観光客の利用を見込んでいる。1泊朝食付きで6480円から。



### スポーツ選手の社会貢献推進へ プロジェクト「HEROs」創設

産経新聞 2017年10月31日



#### 中田英寿氏

日本財団は30日、スポーツ選手の社会貢献活動を推進するプロジェクト「HEROs」を創設したと発表した。障害者などへの支援活動を展開する同財団のノウハウを生かし、選手が現役引退後も社会で活躍できる土台づくりを目指す。

プロジェクトを発案したサッカー元日本代表の中田英寿氏や、米大リーグのヤンキースなどで活躍した松井秀喜氏、世界ボクシング協会（WBA）ミドル級新王者となった2012年ロンドン五輪金メダリストの村田諒太選手（帝拳）ら19人がアンバサダーに就任。中田氏は「社会貢献が楽しんでやれるものになっていく社会になると思う。スポーツにはその力がある」と語った。

### 雑貨店でアートに出会う 彦根で障害者の作品展へ 滋賀

産経新聞 2017年10月31日

彦根市に移住し、祖父母が営んでいた雑貨店を再開した男性が、障害者たちが自由な発

想でつくった美術作品「アール・ブリュット」の展示会を11月3日から開く。県内で見学したアール・ブリュット作品に感動したことがきっかけで「真摯（しんし）な思いで作られた作品を見てほしい」と話している。

計画しているのは、同市日夏町の雑貨店兼ギャラリー「よろず淡日」を経営する疋田実さん（57）。疋田さんは大阪市生まれ。仏像彫刻家を志したあと、木工メーカーに勤めた。

3年前の退職を機に彦根に移住し、かつて祖父母が経営していた雑貨店を約30年ぶりに再開。雑貨販売のほか、現代アート作品や古美術販売のギャラリーにした。

開店後、かつて鑑賞した県内の知的障害者が作った作品を思い出し、アール・ブリュットを広く紹介したいと思い立ったという。大阪在住時代に関わったこともある知的障害者の作品を中心に紹介することにした。

「わたし」と題した自画像など8人の絵画や彫刻作品30点を展示。20日まで。無料。ギャラリーは火・水・木曜日休み。

### 来年は福井で！ 全国障害者スポーツ大会閉幕 中日新聞 2017年10月31日 福井

第十七回全国障害者スポーツ大会（愛顔（えがお）つなぐえひめ大会）の総合閉会式が三十日、松山市の愛媛県総合運動公園陸上競技場であり、西川一誠知事が愛媛県の中村時広知事から大会旗の引き継ぎを受けた。今大会の県勢のメダル獲得数は金十一、銀六、銅六の計二十三個だった。

県選手団約八十人を含め選手、大会関係者、観覧者合わせて約一万九千人が出席。県選手団は退場の際に来年の「福井しあわせ元気大会」開催をアピールする横断幕を持ちながら歩き、スタンドに手を振りながら笑顔で会場を後にした。

終了後に西川、中村両知事らが会見した。西川知事は閉会式の感想を「和気あいあいとしながら、皆さんの力で運営し、情熱を出し切っている様子だった」と述べた。県内開催に向け「できるだけ障スポが県民が身近な形で、一緒になって運営される大会にしたい」と来年を見据えた。



#### ◆400メートル混合リレーで初V

陸上競技400メートル混合リレーで優勝した県代表の（左から）坪田、上甲、金谷、今村の各選手＝松山市の愛媛県総合運動公園陸上競技場で

前日までの悪天候でたまっとうっぷんを晴らす金メダルだった。陸上競技400メートル混合リレー（知的障害）で県代表メンバーの四人が障スポのリレー種目で初となる優勝をもたらした。今大会の県勢最終種目で、来年の福井大会に向けて弾みをつけるメダルとなった。

一走坪田琉聖、二走上甲智晃、三走金谷彩弥香（いずれも嶺北特別支援学校高等部）、四走今村彰彦（就労支援センターすてっぷ）の各選手で組んだ。四人で挑んだ初の大会で、一緒に練習したのは本番前だけだったにもかかわらず、落下もなくバトンをつないだ。

その裏にはチームワークの良さがあった。競技前、坪田選手は「転んだらどうしよう」と不安を抱いていたが、金谷選手が「そんなこと考えないでやろう」と励ました。気持ちが前向きになり、力強い走りを見せてトップで上甲選手にバトンを渡した。アンカーの今村選手は「自信を持って、気持ち良く最後まで走ることができた」胸を張り、来年は「絶対に金を取りたい」と意気込んだ。愛媛から福井へ、笑顔のバトンをつなぐ。（中場賢一）

### <えひめ大会2017>県勢 メダル121個で幕 読売新聞 2017年10月31日 愛媛

◇金54 銀30 銅37

第17回全国障害者スポーツ大会（愛顔つなぐえひめ大会）は30日、松山市などで陸

上、水泳など6競技が行われるなどし、3日間の日程を終えた。28、29の両日は台風22号の接近で大雨が降り、一部競技で中止になったり日程が変更されたりしたが、県勢は10の大会新記録を樹立し、個人競技で金54個、銀30個、銅37個のメダル計121個を獲得した。県総合運動公園陸上競技場（松山市）で行われた閉会式では、全国から集ったアスリートらが笑顔を見せ、別れを惜しんだ。（大谷雄一、福永健人）

#### 閉会式後の記念撮影で笑顔を見せる県選手団（松山市で）

閉会式には高円宮妃久子さまも出席され、中村知事が「皆さんの懸命な姿を通じて多くの県民が感動をいただき、大会に関わった多くの皆さんが支え合うこと

の大切さを胸に刻んだと思う」とあいさつ。久子さまが「これ

からも積極的にスポーツを楽しみ、身体・精神を鍛えながら充実した毎日を送られることを期待します」と述べられた後、炬火が消された。

式典終了後の選手団退場の際には、県選手団約450人が出口周辺に並び、他県の選手たちを握手やハイタッチで見送った。

その後、県選手団の解団式が同競技場で行われ、開会式で旗手を務めた伊関創史選手（陸上競技）から仙波隆三・選手団長に、さらに中村知事に団旗が返還された。仙波団長は選手らに「大会での経験は皆さんに自信と励みをもたらしたと思う。今後の人生に生かしてほしい」と呼びかけた。



#### 力走を見せる児玉選手（松山市で）

◇女子1500 児玉3連覇

陸上競技の女子1500メートル（障害区分＝聴覚障害）2部（40歳以上）で、県勢の児玉裕喜子選手（57）が自身の大会記録7分44秒76を1分近く更新する6分51秒83で制し、大会3連覇に花を添えた。

強風が吹く悪条件下でのレースで足も重かったが、大会を支えるボランティアやスタンドで応援してくれる人らへの感謝を胸に、ラストスパートをかけた。

レース後は、金メダルを手に「目標の6分台の記録を出せてうれしい」と笑顔を見せた。また、来年2月の愛媛マラソンに出場予定といい、「初挑戦だが、完走できるよう頑張りたい」と手話で話した。

◇バレー女子 県勢銅逃す

伊予市で行われたバレーボール（聴覚障害者の部）は県勢女子が3位決定戦に臨んだが、広島市に0-2で敗れ、銅メダル獲得はならなかった。

第1セットは相手の強打に崩され、押し切られた。第2セットは粘り強いレシーブで相手のミスを誘い、一時はリードしたが、終盤の連続サービスエースなどで逆転された。村木理恵主将（46）は「4年前からこの大会のために練習してきた。トスもつながり、みんな笑顔でプレーできてよかった」と手話で語った。

◇10の大会新 知事喜び

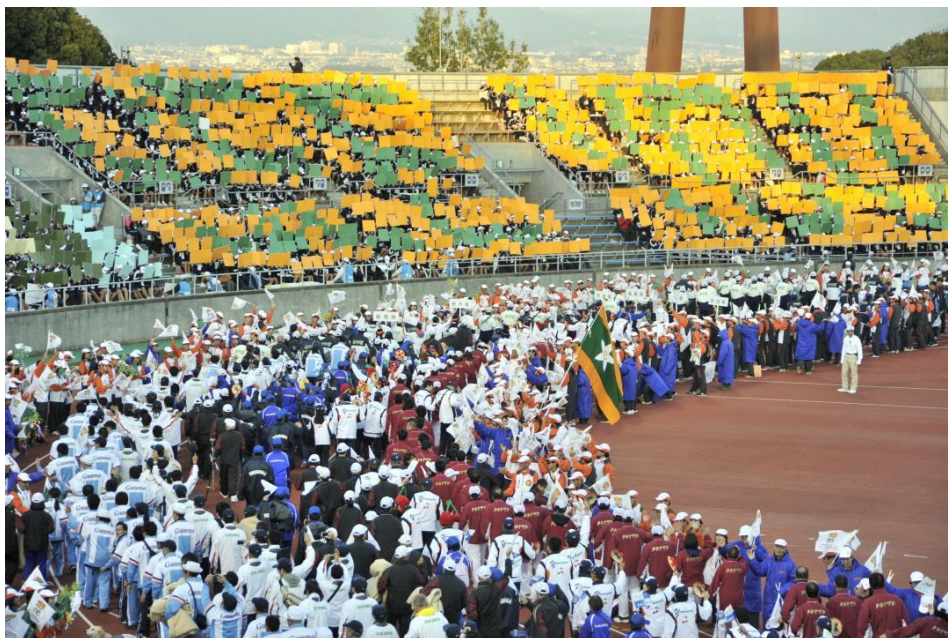
中村知事と、来年の開催県・福井県の西川一誠知事は式典終了後、共同記者会見に臨み、中村知事は「応援やボランティアに参加するなど総力を結集して取り組み、140万県民に大きな自信を与える大会になった。県勢の選手たちも頑張っ

て今年の2倍以上のメダルを獲得し、10の新記録が生まれて良かった」と振り返った。西川知事は「えひめ国体やえひめ大会の成功と（愛媛県の）“愛”を引き継ぎたい」と語った。

愛媛勢のメダル総数121 挑戦と交流の3日間 全国障スポ大会閉幕

愛媛新聞 2017年10月30日

第17回全国障害者スポーツ大会「2017愛顔（えがお）つなぐえひめ大会」の閉会式が30日、松山市上野町の県総合運動公園ニンジニアスタジアムであり、3日間にわたって熱戦を繰り広げた障害者アスリートの祭典が幕を閉じた。愛媛勢のメダル総数は121個（金54、銀30、銅37）で過去最高となった。



選手退場では愛媛県選手団がコース両端で他県の選手団を見送ったほか、スタンドでは「SEE YOU」の文字をつくって別れを惜しんだ。30日午後、県総合運動公園ニンジニアスタジアム

閉会式は、高円宮妃久子さまをお迎えし、47都道府県と20の政令

指定都市の選手・役員約5500人が参加。大会会長の中村時広知事が「選手の懸命な姿を通じて多くの県民が感動をいただいた。大会に関わった全ての皆さんに心から感謝申し上げる」とあいさつ。中村知事から次回開催の福井県の西川一誠知事へ大会旗が引き継がれ、炬火（きょか）が消された。

選手団の退場では、愛媛県選手団が全国の選手団を見送った。

愛媛で初めて開催された全国障スポ大会は、県内9市町で13競技と三つのオープン競技を実施し、愛媛県選手団約290人を含む選手約3300人が出場した。

#### 茨城国体・障害者スポーツ大会応援ポスターコンクール 古谷田さん(岩瀬西中)ら最優秀

茨城新聞 2017年10月31日

2019年の茨城国体・全国障害者スポーツ大会に向け、県内の児童生徒が描いた両大会の応援ポスターコンクールの表彰式が30日、県庁で開かれ、各部門の入賞者に賞状などが贈られた。

応援ポスターは県内の小中学校、特別支援学校から計3740点の応募があった。9部門でそれぞれ最優秀賞1点、優秀賞、佳作各2点が選ばれた。

#### 表彰状を受け取る子どもたち=県庁

表彰式で、県国体・障害者スポーツ大会局の石田奈緒子局長は「力作ぞろいで選ぶのがとても難しかった」とあいさつ。中学生の部で最優秀賞に輝いた桜川市立岩瀬西中3年の古谷田吏緒さんが「スポーツの躍動感が出るように描いた」と笑顔を見せた。

応援ポスターの入賞作品は11月2日まで、県庁2階県民ホールで展示されている。



各部門の最優秀賞の受賞者は以下の通り。(敬称略)

小学1年の部 小沼侑樹(つくば・松代小)▽同2年の部 伊藤圭辰(桜川・岩瀬小)▽同3年の部 石橋愛々(小美玉・小川小)▽同4年の部 柴崎遥仁(取手・久賀小)▽同5年の部 柏谷遥香(つくば・二の宮小)▽同6年の部 小川紗楽(茨城・青葉小)▽中学生の部 古谷田吏緒(桜川・岩瀬西中)▽特別支援学校小学部の部 成田結愛(県立美浦特)▽同中学部の部 伊藤亜斗夢(県立水戸聾)

## 県教委、教職員研修に力 発達障害への対応強化 知識深め、寄り添う



茨城新聞 2017年10月31日  
発達障害などのある児童生徒への指導法を学ぶ教員たち  
=笠間市平町

発達障害のある児童生徒への指導法を身に付けてもらおうと、県教委は、教職員を対象とした研修に力を入れている。発達障害に関する知識を深め、より児童生徒に寄り添った教育支援につなげるのが狙い。専門家による講演や模擬体験などを通して、子どもの個性や能力に応じた対処法や授業スタイルを探っている。

研修会は年に数回、県内の教職員を対象に、基礎知識から発展的な内容までを研修する。24日

に開かれた研修会には、県内の小中高校、特別支援学校の教職員約200人が参加。講演や実践発表などを通して、学習支援や授業方法について理解を深めた。

発達障害は、生まれつきの脳機能の発達のアンバランスさ、環境や人との関わりのミスマッチなどから、社会生活に困難が生じる障害。2004年施行の「発達障害者支援法」で定められ、自閉症や学習障害、注意欠陥・多動性障害などさまざまな症状がある。

12年12月の文部科学省の調査によると、小中学校の通常学級に在籍している児童生徒の中に、学習面、または行動面に著しい困難があるとされる児童生徒の割合は約6・5%とされ、40人学級で1学級当たり2～3人の割合になる。

07年施行の改正学校教育法で全ての学校での特別支援教育の推進が明確に示された。発達障害も新たな支援対象として、ニーズに応じた指導と支援の充実が求められるようになった。

県教委によると、小中学校では、学習に遅れがある▽集団行動がうまく取れない▽不適応行動を起こしてしまうなどの問題がある児童生徒が通常学級に所属し「対応に苦慮する教職員も少なくない」(県教委)という。

特に、最近では、高校でも学習面や人間関係でつまづく生徒が増えているといい、社会的障壁を取り除くための合理的配慮の観点からも、県教委は「発達障害の理解と対応は喫緊の課題」と位置付けている。

研修会の講演には、発達障害者の支援に取り組む企業「LITALICO(りたりこ)」のジュニアスーパーバイザー、吉田有里さんを招き、障害の内容などに合わせた各種アプローチの方法について指導を受けた。常陸太田市立世矢小の生田目通晴教諭は「つまずきの要因から子どもの特性に合わせた支援の手法を知ることができた」と話す。

また、児童生徒の立場に立って疑似体験する実習では、吉田さんが「つまずいてから支援するのではなく、つまづく前に手だてを講じて支援することが大切」とアドバイスした。

研修に参加した阿見町立竹来中の宮本順子教諭は「中学校では一人一人の特性に応じた関わりが不十分と感じる。しっかりと研修したい」と話した。11月には「行動分析」に関する研修が開かれる。(朝倉洋)

## 障害者や高齢者に笑顔届け13年 山梨セラピードッグクラブ、訪問500回突破

産経新聞 2017年10月31日

### ■飼い主に服従…感動と癒やし

忠誠心と愛情豊かな「セラピードッグ」が保育園、病院、老人ホーム、福祉施設などで活躍し、人々の心を癒やしている。県内では平成16年、元警察犬1等訓練士の中村幹さん(66)が山梨セラピードッグクラブ(甲斐市岩森)を設立。同クラブの施設訪問回数は今月、500回を超えた。創立から13年。犬たちは多くの人たちに笑顔を届けている。

今月26日、甲斐市内で行われたセラピー犬の合同訓練。「駆け足」「回れ右」「3歩前進」。車椅子の中村さんの号令がかかると、11匹の犬たちはペアを組む飼い主の指示通りに動く。

犬は飼い主の左側。飼い主が歩く速度に合わせて進む「脚側行進」から始まり、「座る」「伏せる」「横に寝る」「物をくわえて持ってくる」など訓練は十数項目に及んだ。訓練対象は犬と飼い主だ。中村さんは「これは服従訓練。さらに進めると警察犬の訓練になる。セラピードッグ専用の訓練はありません」と説明する。

セラピー犬認定には公的制度はない。山梨セラピードッグクラブの場合、中村さんが独自に行う初回試験に合格すれば、クラブとして認定する。その後、毎年更新試験を受け、「最終の4回目に合格すると一人前」(中村さん)という。

古くからの会員でラブラドル・レトリバーを飼う田中舞美さん(42)の訪問数は260回。「犬と触れ合うと、座っていた人が立ち上がる、リードを持とうとするなど、不思議な力を感じます」と話す。

中村さんは昭和57年に警察犬の1等訓練士になったが、平成13年、脳内出血で半身が不自由となり車椅子生活に。

「どん底の私を救ってくれたのが犬たち。セラピードッグの養成ならできると決心し、クラブを創設した」

セラピー犬の意義について、中村さんは「飼い主の言うことを完璧に聞いて服従する姿は、見る人に感動を与え、癒やしにつながっていく」と話した。

◇セラピードッグ 幼児、高齢者、障害者、入院患者らと接することで、人の心や体の回復を助ける活動をしている犬。国や自治体による認定制度はなく、各地域でNPOやボランティア団体が運営する。組織によって独自にセラピー犬を認定しているところも。県内で最大規模の山梨セラピードッグクラブでは、13年間で67頭の認定犬を輩出している。

## 「心のバリアフリーを」 車いす女性が講演 小山 下野新聞 2017年10月31日



バリアフリーについてトークする池田さん(中央)

【小山】東京都渋谷区の温泉施設で2007年に起きた爆発事故に巻き込まれ、車椅子生活を送る池田君江(いけだきみえ)さん(42)＝東京都世田谷区＝のトークショーが30日、中久喜のイオン小山店で開かれた。池田さんは「周囲の心遣いで障害は乗り越えられる。大切なのは心のバリアフリー」と訴えた。

池田さんは、車椅子利用者やお年寄りが安心して外出できる社会の実現を目指し、13年にNPO法人「ココロのバリアフリー計画」を設立した。イオンリテール北関東・新潟カンパニーは、栃木、新潟、群馬、茨城の

各県内のイオン計 44 店が 11 月から「ココロのバリアフリー計画」の応援店に加盟するの  
に合わせ、トークショーを行った。

池田さんは「家にこもりがちになったが、店側が来店を歓迎する姿勢や従業員の気遣い  
で外に出る勇気が出た」と自身の体験談を披露。「『何かお手伝いすることがあれば一言掛  
けてください』という何げない言葉がうれしい」と強調した。

「十人十色 障害を知って」 地域で暮らす課題考える 東京新聞 2017 年 10 月 31 日  
障害のある子どもとの日常や課題について話す親たち  
＝中野区で

障害のある人が、地域で暮らしていくための  
課題などを考えるシンポジウムが、中野区内で  
開かれた。発達障害や医療ケアが必要な重度心  
身障害の子を持つ母親四人が発表に立ち、「障  
害がある子の日常を知って」「孤立しがちな親  
への支援も必要」などと話した。

NPO 法人の「なかのドリーム」と「わかみ  
やクラブ親の会いろとりどり」が主催した。

発達障害の小学六年の息子を育てる大林ますみさんは、「感覚が過敏」「言動が誤解を受  
けやすい」といった息子の特性を説明。今は地元の小学校で配慮があるが、社会に出てか  
らが不安だという。「見た目で分からず、障害の特性も十人十色。障害を知ってもらい、特  
性を生かせる社会になってほしい」と話した。

岡田美奈子さんの中学一年の息子は、脳性まひや呼吸障害などがある重度心身障害児。  
家族の会話は理解し、文字でコミュニケーションも取れるが、現状では学校卒業後の選択  
肢が限られる。岡田さんは「幅広い職種が選べ、地域に受け入れる施設が増えれば」と求  
めた。（奥野斐）



「一時保護所」県が拡充へ 児童虐待、問題行動に対応 佐賀新聞 2017 年 10 月 31 日

佐賀県は、虐待などで命に危険が及ぶ恐れがあったり、問題行動を起こしたりした子ども  
を一時的に預かる「一時保護所」を拡充する。虐待対応件数の増加などで施設の定員を  
超える時期があり、今月から増築工事に取り掛かっている。増築分は来年 10 月の開所を  
目指し、定員は従来の 2 倍の 28 人に増やす。

一時保護所は佐賀市に 1 カ所あり、虐待に加え、非行や親の経済的な事情で、児童相談  
所が必要と認めた 18 歳未満の子どもを緊急的に保護している。施設内で学習や運動をさ  
せながら経過を観察し、対応を探る。

施設の延べ床面積を 1031 平方メートルにほぼ倍増させ、居住スペースを 8 室から 1  
8 室に増やす。定員は現行の男女各 7 人から 14 人ずつに変更する。総工費は 2 カ年で 3  
億 9110 万円。

前年度の県内の児童虐待の対応件数は 275 件で過去最多だった。一  
時保護所では原則として最長 2 カ月受け入れているが、専門的な医療機  
関でのケアが必要な場合や、保護者との調整で入所期間が長期化の傾向  
にある。児童養護施設や里親に委託するケースもあり、昨年 8 月には 3  
3 人を一時保護所で引き取ったり施設に預けていたりした時期もあった。

県こども家庭課は「増築によって、対応できる態勢の充実を図りたい」  
と話す。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も  
大阪市天王寺区生玉前町 5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

